

青少年教育施設プログラムを活用した小学校長期自然体験活動

カヌーと理科の学習を結び付けることで、川原や川岸の石を手にとって観察したり、流れの速さや水量を肌で感じたりすることができました。テント泊や羽釜を使った野外炊飯、大洲城までのカヌーツーリングなど、学校では体験できない交流の家ならではの活動を通して、「生きる力」を育みました。

1 事業実施までの経緯

学校を離れて行う「集団宿泊活動」は、通常の学校生活では実施することのできない自然体験や交流体験など、様々な体験活動の実践が可能である。「小学校学習指導要領解説特別活動編」では、「望ましい人間関係を築く態度の形成などの教育的な意義が一層深まるとともに、高い教育効果が期待されることなどから、学校の実態や児童の発達の段階を考慮しつつ、一定期間（例えば1週間〔5日間〕程度）にわたって行うことが望まれる。」と長期の集団宿泊活動の推進を提示している。

それを受けて、国立大洲青少年交流の家では、青少年教育施設プログラムを活用し、学習指導要領、地域資源の活用等と関連付けながら、3泊4日の小学校長期自然体験活動プログラムを企画・立案した。平成23年度より当施設を利用している小学校団体を調査し、学校規模や利用時期、活動のねらい等が合致している伊予市「中山・佐礼谷連合小学校」にモデル校を依頼した。

今年度に入り、学校を訪問しての事前打合せやメール・電話での連絡、諸団体との調整等を重ねながら、実施に向けての準備を計画的に進めていった。

2 ねらい

関係諸機関と連携して青少年教育施設プログラムの教材化を進め、モデルプログラムを試行することで問題点を検討し、長期自然体験活動の普及と推進を図る。

- 3 主 催 独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立大洲青少年交流の家
- 4 期 日 平成24年9月25日（火）～28日（金） 【3泊4日】
平成25年1月25日（金） 小学校自然体験活動普及・推進検討会議
- 5 場 所 国立大洲青少年交流の家 肱川カヌー場 他
- 6 参加人数 伊予市中山連合小学校 中山小学校5年生 児童22名 引率3名
佐礼谷小学校5年生 児童5名 引率2名
- 7 講 師 大洲市立河辺中学校長 松井 康之 氏
国立大洲青少年交流の家企画指導専門職
〔アドバイザー〕武蔵野市教育委員会教育部指導課 荒木俊夫 氏

8 日程及び活動内容

【9月25日(火)】 ※テント泊

	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:30	17:00	19:00	20:30	22:00
学 校 発	入所式	グループ	昼	班 会	ビジュアル	つどい			入 就	
	オリエン	ワーク	食	テント	オリエン	夕食	星空観察		浴 寝	
	テーション	ゲーム		設 営	テーリング	自由				

入所式の後、グループワークゲームの時間を設定した。アイスブレイクで緊張をほぐしながら、ペア、グループ、全体と集団を増やし、身体接触のあるゲームも取り入れた。活動の合間にふりかえりを入れ、交流の家での生活で守ってほしいルールや友達とのかかわり方、集団生活の心構え等を考えさせた。昼食後は、テント泊に備えて班ごとにテントを設営した。交流の家の敷地内を活用したビジュアルオリエンテーリングも実施し、自然の中を散策しながら班の協調性を高めていった。夜は、自然環境館の屋上で星の専門家を招いて、木星の観察を行った。「初めて木星を観察した」という児童が多く、感嘆の声が上がっていた。



【9月26日(水)】 ※ミニツアーリングは3泊以上、宿泊する団体のモデルプログラム

	7:30	9:00	10:00	14:00	17:00	19:00	20:30	22:00
起床	朝食	班 会	カヌー研修①	カヌー研修②	テ 撤	つどい	班 会	入 就
つどい	班 会	テント	理 科 学 習	ミニツアーリング	ン	夕食	出し物	
清掃	係 会	干 し	「流れる水のはたらき」	(大洲城コース3km)	ト 収	自由	練 習	浴 寝

まず、肱川カヌー場で乗り降りやセルフレスキュー、前進・後退、方向転換を練習した後、約300m上流にある観察・実験場所まで全員で漕いで上がった。カヌーを使った理科の学習では、川の内側と外側での流れの速さの違いや川底の深さを調べたり、実際に対岸へ漕いで渡り、間近で川岸の様子を観察したりした。昼食後、大洲城を目指し約3kmのツアーリングに出発した。途中、いくつかの瀬張り（鮎を捕る仕掛け）を乗り越えながら、誰1人リタイヤすることなく、ゴールである大洲城へ到着することができた。大きな挑戦を乗り越えた子どもたちからは、達成感や充実感が漂っていた。明日のキャンプファイヤーに備え出し物を練習したり、外遊びを楽しんだりするなど、ゆったりと時間を確保できることも長期の魅力である。



【9月27日(木)】

	7:30	9:00		13:00		17:00		21:00	22:00
起床	朝食	竹箸	野 外 炊 飯	ウオークラリー	つどい	キャンプ	入	就	
つどい	班 会		(カレー作り)	(2.4kmコース)	夕食	ファイヤー			
清掃	係 会	作り	昼食・後片付け	キャンプファイヤー準備			浴	寝	

2日目の午前中は、竹箸作りに取り組んだ。小刀をうまく使い、自分だけの「マイ箸」を作ることができた。野外炊飯では、羽釜での炊飯に挑戦し、カレーを作った。どの班も手際よく調理を進め、おいしいカレーができあがった。午後からは、ウオークラリー（2.4km）を実施した。5分間隔で班ごとに出発し、コマ図の情報を読み解きながら、約1時間の「フラワーパークめぐり」コースを楽しんだ。帰った班から、テントを協力して撤収した。その後、プログラムは入れず自由時間とした。お楽しみのキャンプファイヤーも班の出し物で盛り上がった。



【9月28日(金)】

	7:30	9:00		12:00	13:00		14:30	15:00	16:00
起床	朝食	ストーンアート	昼	ふりかえり	退	出	学		
つどい	班会			作 文	所		校		
清掃	点検	クライミングウォール	食	アンケート	式	発	着		

最終日、それぞれの部屋をきれいに片付け、ストーンアートに取り組んだ。2日目のカヌー研修時に川原で拾った石に、自分の好きな絵を描いていくプログラムである。そして、最後の難関、8mのクライミングウォールに挑んだ。まず、3mの壁で練習した後、ハーネス（安全ベルト）を装着し、3つのコースへチャレンジしていった。周りの声援に後押しされ、半数以上の者が頂上まで到達することができた。レストランで最後の食事をすませ、作文を書くことで4日間の活動をふりかえり、事業を締めくくった。



10 参加者の声

参加者の事後アンケート結果

*満足：93.7% *やや満足：6.3% *やや不満：0.0% *不満：0.0%

- キャンプファイヤーのとき、はじめは真っ暗だったけど、火がついたらとても明るく感動しました。
- 小刀をうまく使って、箸作りができました。
- カヌーに乗っての理科の勉強はとても楽しかったです。水の流れる速さが、内側と外側でぜんぜん違ったので驚きました。
- カヌーで3kmのミニツーリングは、疲れたけどとても楽しかったです。
- 2泊3日ではできない活動ができ、子どもたちにとっても意義深いものとなりました。
- ミニツーリングは、普通ならできない経験ができ、子どもたちも達成感をもつことができました。

11 成果と課題

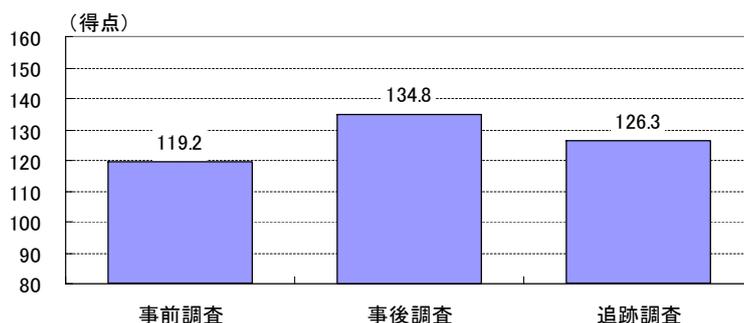
参加者の変容について、「生きる力」を測定する「IKR評定用紙」の簡易版を用いて、入所前日（事前調査）、退所式前（事後調査）、活動1ヶ月後（追跡調査）の3回調査を行った。事前・事後・平均値を比較した結果、「生きる力」の全項目で向上が見られた。この結果からも、青少年教育施設のプログラムを活用した体験や、日常生活とは異なる環境の中で、長期の集団宿泊活動を体験することは、青少年の「生きる力」を育くむために大変有効であると考えられる。

さらに、大洲の地域資源である肱川と大洲青少年交流の家のメインプログラムであるカヌー研修を組み合わせた「カヌーで理科（流れる水のはたらき）」と大洲城までの3kmツーリングの活動が確立できたことにより、理科や総合的な学習の時間の授業としてカヌー研修を振り替えることが可能となった。授業時数を確保することは、長期自然体験活動の課題であることから、今後も学習指導要領と関連付けながら、他教科でもプログラムを開発していく必要がある。

長期になることで参加者の精神面や体調面の管理、予算、教員の負担等、課題は多いものの、その分、本物の体験とて残るものも大きい。今後も課題や問題点の検証を行い、小学校における自然体験活動の有効性をさらに深く追求し、自然体験活動の普及・推進につなげていきたい。

生きる力を測定する「IKR評定用紙（簡易版）」
筑波大学の橘教授、信州大学の平野教授らが「生きる力」の変容を測定するために開発したアンケート用紙。「生きる力」を「心理的社会的能力」「徳育的能力」「身体的能力」の3つの指標に分類し、28項目に絞り込んだ質問を設け（例えば「いやなことはいやとはっきり言える」「人の心の痛みがわかる」など）、「とてもよくあてはまる（6点）」から「まったくあてはまらない（1点）」の6段階評価で回答を求める評定用紙。【事業評価に使える！「生きる力」の測定・分析ツール】参照

「生きる力」の変容（得点範囲：28～168点）



【資料 1】

青少年教育施設プログラムを活用した小学校自然体験活動に関する普及・推進検討会議【議事録】

期 日 平成25年1月25日（金） 10:00～12:00

会 場 国立大洲青少年交流の家 所長室

参加者	伊予市立中山小学校長 吉田京子	大洲青少年交流の家所長 松岡孝次
	伊予市立佐礼谷小学校長 松田千壽	次長 多田 賢
	大洲市立長浜小学校長 深井修一	主任企画指導専門職 上田 謙
	西予市立皆田小学校校長 酒井史朗	企画指導専門職 木口喜惣
	西予市立多田小学校校長 内藤信男	武蔵野市教育委員会教育部指導課
	大洲市立河辺中学校校長 松井康之	教育アドバイザー 荒木俊夫

議 事

1. 本事業の趣旨説明
2. 小学校自然体験活動の充実及び長期化に向けての展望
3. 青少年教育施設プログラムの活用
4. 武蔵野市「セカンドスクール」の実践報告及び指導助言
武蔵野市教育委員会教育部指導課 教育アドバイザー 荒木俊夫 氏
5. その他、情報交換

会議記録

次長（多田）による司会・進行のもと、所長（松岡）あいさつ、各自の自己紹介で会議がスタートした。まず、事業担当者である主任企画指導専門職（上田）が、機構のホームページ資料や中山連合小学校が実施した3泊4日のモデルプログラムの報告書をもとに、事業の趣旨説明を行った。

次に青少年教育施設プログラムであるカヌーを活用した理科学習やモデルプログラムを実施した5校が意見交換を行った。

【A小学校】

天候に恵まれた。星空、カヌーともにできた、雨天プログラムも考えてもらっていたが、雨天のことを考えるととても不安だった。体験を通して学習ができたことがとても良かった。本校は山の中にあり、なかなか川の学習ができない。身近なところに理科の学習に適した川がない。川の流れなど身体で触れて学習することができたことが一番の効果だった。3泊4日ということで時間的なゆとりがかなりあった。それが、心（精神面）のゆとりになった。そのため、活動も充実した活動にすることができた。予算的な問題があるが、バスなどを手配していただいたため、保護者の負担を減らすことができた。

【B小学校】

子どもたちが帰ってきた様子を聞くと昨年度私が感じたことを子どもたちも感じているようだった。3泊4日になることで活動にゆとりがあるので、一つ一つの活動を子どもたちが満喫できていた。全員の感想で、「どの活動がよかったか。」という問いに対して、全員が「えっ。」という答えだった。どの活動について答えれば良かったのか分からなかったのだと思う。子どもたちにとっては全ての活動がよかった。それぞれの活動に満足するだけできた。2泊3日では、時間の関係で十分できなかったが3泊4日になることで、一つ一つの活動に十分時間をとることができたことがよかったのだと感じる。反対に教師にとっては、宿泊を交代するというのも考えられるが、受け持ちが交代することは無理なので、受け持ちにかなりエネルギーがないと難しく、かなり負担となった。昨年度、いろいろと改善点を提案したが、今年度は改善していただいた。昨年度と同担当だったのでそこも比較することができ、大変ありがたかった。箸袋も好評で、実際に作ったものを持ち帰ることができたということも子どもたちにとって満足につながった。子どもたちの感想では、今までだとある活動に良い感想が偏りがちだが、どの子の感想を聞いてもばらばらで、よい思い出を語ってくれたことから、全ての活動が良かったことが伺える。食事や給水もゆとりをもって行うことができた。テント泊ではトイレが不便だった。学級便りには、全員が楽しかった、満足だったという感想がびっしり書かれていた。ふりかえりでも、文章のなかなか書けない子たちが、集中して書けていたこともよかった。費用面での配慮もあったため、保護者の負担も少なく、ありがたい事業である。

【C小学校】

理科の「流れる水のはたらき」を実施した。集団宿泊研修ではカヌーができなかったため、この事業でカヌー体験と理科の勉強ができるということで参加した。カヌーで川を流れたり、パドルで実際に深さを測ったり、水の抵抗を感じたりすることができた。教頭が前任校で「流れる水のはたらき」を体験をしていて、参加させやすかった。できれば、C小は肱川の上流地域にある学校なので、いくつかカヌーを積んできていただいて、上流の様子を観察することはできないだろうか。

【D小学校】

5年生24名「カヌーで理科」を実施した。事業時数は理科で4時間、ストーンアートを総合で1時間教育課程に合わせて行った。2名の指導員についてももらったおかげで、安全面だけでなく、実験観察についても分かりやすくリードしてもらった。1学期の集団宿

泊研修ではカヌーができなかった。今回このような機会を与えてもらってありがたかった。ダイナミックでスケールの大きい理科の学習ができた。カヌーの移動が心配だったが、トラックで近くに運んでいただいたことが良かった。体験プログラムに興味を持って取り組み、単元テストでもいつもより良い点をとることができた。150点満点で127点の平均点を取ることができた。本校は肱川の河口に位置しているため、肱川中流の違った姿を観察できたことも大変良かった。

【E 小学校】

「子どもたちに足りないものがある。体験に基づく快感を感じさせたい。限界を乗り越えてもらいたい」との思いから「36kmウォーク」という、肱川源流から、八幡浜へ抜け、犬寄峠を越え、大洲市内を巡り交流の家で宿泊する学校行事を実施している。初めは30kmウォークだったが、36kmとなった。地域や保護者、交流の家職員にサポートしていただいて実現できている。普通なら、一日歩いて終わりだが、交流の家で宿泊することで、完歩の感動を寝食を共にしながら共有できる。翌日は、授業で、地域のことなどを公民館の人などに講話してもらう。理科関係では、久万高原へ行き天体観測もしている。こちらでもできるようだが、3月初めは、カヌーも星空観察も少し寒い。体育で、テニスをしている。この行事を通して、忍耐力が身についている。いろいろなことに、活気が出てきている。

日頃、大洲青少年交流の家での事業等で講師をしていただいている大洲市立河辺中学校校長松井康之氏より、施設の活用法、当所プログラム等についての指導助言があった。

【松井校長】

- 理科教員の一人として、天体の学習は非常にやりにくい。先生にとってもネックになっている。生徒にとっても実体験無しのパソコンのシュミレーションや写真で見るとしかない。重大な単元だと思っているので、体験活動の一環として取り入れていただくことは理科教員として大変ありがたい。天体観測は理科の教員でも大変難しい。教員自身得意な人もあまりいない。時々得意な人もいるが、理論に走りすぎて、子どもたちには理解してもらえない。この中で一人でも星に興味を持ってもらえるとうれしいという思いでやっている。団体の数や団体の人数、授業進度、意識して構成している。
- 平成9年、大洲青少年交流の家での事業において、理科プログラム（指導者は理科同好会）を作った。ここへ来て授業ができるプログラムを作るのが目的である。この単元では、このような授業ができるよというリストを作成し近隣の学校へ紹介した。一時期は多くの人を利用したが、最近では少なくなってきた。なぜなら、エコスタディールームの施設設備、備品等がどのようなものがあるのか知らない先生が多くなった。ここなら高校卒業レベルまでの授業が可能である。交流の家で、こちらに来るとこのような単元の授業ができますよというリストをもう一度作成し、各校へ呼びかけることが大切ではないか。小中学校では購入できないような顕微鏡が50台、解剖顕微鏡も20台ほどある。
- この行事を授業時数に入れることは難しい。学校の中での運用はできると思う。理科的なことをしたから理科の時数にというのはいけない。星空も5年生の理科に単元はない。4年生と6年生にしかない。だから、学習内容からここではどのようなことができるというものをピックアップし、各校へアピールし、教育課程に組み込んで利用して

いただかないと、学校サイドに任せると実現しないであろう。学習指導要領では、特別活動と総合的な学習の時間は代替することができるという一文ができた。他の教科や行事は、代替できないものというのが県教委の回答である。また、時数に数えるならば通常教諭が担当すること。学年に応じた内容で、評価がきちんとできるものでなくてはならない。だから、T2として、ゲストティーチャーとしてお願いすることができると思われる。

続いて武蔵野市教育委員会教育部指導課教育アドバイザー荒木俊夫氏より、武蔵野市が実践しているセカンドスクールの紹介や指導助言があった。

<武蔵野市のセカンドスクールの概要>

- ・平成4年より1泊2泊1泊3泊を小中学校から公募し、夏休みに試行
- ・平成7年より全小学校でセカンドスクール実施（3泊程度）、中学校も試行
- ・平成8年より全中学校が実施（3泊程度）
- ・民泊での共同生活や農業体験による高い教育効果が認められ、小学校では多くの学校が7泊8日を、中学校ではすべての学校が、4泊5日を実施

<指導助言>

【教員の負担を減らすことについて】

教員は19時までの勤務とし、それ以降は、基本、自由にしてよい。19時以降は、学生、教員志望者、地域の方などの補助指導者が受けもつこととし、緊急な場合だけ対応する。補助指導者は、必ず各部屋1人つける。

小さい子どもを抱える女性教員は、なるべく担当学年にしない。もしくは期間中、交代制にする。担任以外の教員も長く学校を離れる場合、臨時の教員を配置したり、時間割の変更したりする。

【反対する保護者への対応について】

習い事への対応として、現地にピアノなどを用意したり、塾のドリルも持ってきたりしてよいことにする。基本そこできできないことをさせる。この事業の最大の効果は、コミュニケーション能力の向上で、何より親と会話するようになる。結果、学力も高くなり、武蔵野市は全国1位の秋田県より高い。

【長期宿泊体験のよさについて】

子どもたちのアンケートで見る事業のよさは、「友達と一緒に生活できた」「体験活動ができた」「家から離れることができた」など。また泊数を多くして長期化することで、プログラム全体に余裕ができる。基本は、午前・午後に1つずつのプログラム、夜にプログラムは入れない。2泊だとこのようなゆとりがでない。武蔵野市は6～7泊。初めは保護者や教員から反対の意見が多かった。「授業をやらないで大丈夫なのか」、「習い事はどうしたらいいのか」等、多くの反対意見があった。長い議論を経て今がある。

【大洲青少年交流の家の取組について】

テントでの宿泊、箸造りなど、とてもよい活動である。家庭ではなかなか体験する機会がない。一生の宝物になる。カヌー体験を通して理科の学習をする。命がけの体験は財産となる。星空観察もよい。都会では見るができない。2校連合での取組も良い。人間関係が深まるし、広がる。他の事業で、松井先生に指導していただいた事業では、天体観測で、天気が悪く3分くらいしか実際に見られなかったが、親も子もとても感動していた。親子で星空を見たことがなかったという親もいた。みんなが、星空に興味を持つような説明をしてもらった。ありがたかった。最後に荒木先生の学校がテレビ取材を受けたときのDVD視聴し、道徳教育と体験活動の関連資料や、学校行事、体験学習の進め方の資料について補足説明があった。

【行政の取組について】

東京都は、学力向上に力とお金を注いでいる。東京都の資料にも体験活動の充実という項目があり、都全体としても、学力向上には自然体験活動が大切であるという意識が広がっていることが分かる。最後に、荒木先生の学校がテレビ取材を受けたときのDVD視聴し、道徳教育と体験活動の関連資料や、学校行事、体験学習の進め方の資料について補足説明があった。

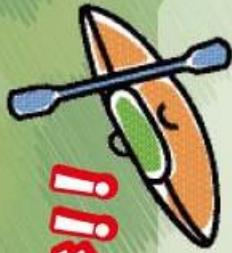
おわりに…

普及・推進検討会議は、実施したモデルプログラムや先進校の取り組みをもとにした活発な意見交換の場となり、小学校における自然体験活動の充実や長期化に向けての手がかりをつかむことができた。



国立大洲青少年交流の家体験プログラム(カヌー)を活用した

「生きた学び」のある 体験学習にチャレンジ!!



- 1 実施時期 9月～11月上旬(単元の配置や気温・水温を考慮)
- 2 単元名 第5学年 理科 「流れる水のはたらき」
- 3 単元目標 流水の様子や流水による地面の変化を、河川の様子、流速や水量、自然災害などと関連付けながら調べ、見いだした課題を実体験による学習や写真・映像等の資料に基づいて探求していく活動を通して、流水の働きや規則性についての見方や考え方を育てる。
- 4 単元の構成
 - 第1次: 4時 地面を流れる水のはたらきを調べよう(自校での学習)
 - 第2次: 5時 川の水のはたらきを調べよう(交流の家の学習)
 - 第3次: 3時 川の流れと土地の変化を調べよう(自校での学習)

5 交流の家で学ぶ意義

「生きた学び」のある体験学習とは…

「生きた学び」とは、自然や人とのかわりという本物の体験活動の中から児童自身が課題を見付け、主体的に判断しながら、よりよく課題を解決し、日常生活に生かしていくという学びである。
この「生きた学び」を充実させるためには、学習課程における児童の学習意欲の持続が不可欠となる。学習意欲の持続とは、児童が「自ら学びたい」「学ぶことが楽しい」という思いをもちながら、見通しをもって主体的に学習に取り組むことであり、学習過程において児童自身が解決したいと思うような課題を設定することが重要である。

そこで…
広大な狐川の流れの中で常時行われている交流の家の体験プログラム(カヌー)と本単元の現地観察・実験を結び付け、実際に川へ出かけ、カヌーに乗って観察ポイント(能行した中流域)へ移動し、河原や川岸の石を手にとり観察したり、流れの速さや水量を肌で感じたりできる「生きた学び」のある体験学習を展開することが可能となる。このダイナミックな体験学習は、児童の理科学習への興味・関心、学習意欲を高めるだけでなく、より確実な学習内容の理解や定着、さらには、体験活動が不足している児童への貴重な自然体験やクラスの思い出づくりにもつながるはずである。

- 6 準備物 教科書、学習ノート(交流の家で準備)、筆記用具、探検バック、タオル、濡れてもよい服装、サンダル(かかとのあるもの)、帽子、着替え(濡れた場合を想定して)、水筒
※眼鏡の方は眼鏡バンド

7 本時の目標

第2次 川の水のはたらきを調べよう
狐川の現地観察に出かけ、カヌーを活用して水の流れ方や河原・川岸の様子等について調べ、流れる水の働きによって、川は周りの様子を変化させることを実体験として捉えることができる。

8 学習の流れ(第2次:5時)

時間	活動内容	備考
9:00	学習「狐川について知る」 場所: 視聴覚室 ・カヌーができる装備、筆記用具、その他学校で指示された物、ライフジャケットを持って集合	ビデオ視聴約20分 学習ノートを配布
9:45	体験「カヌーに乗ってみよう!!」 場所: 狐川カヌー場 ・交流の家/バスで移動 ・駐車場前でパドル練習→パドルとカヌーを運び出し練習	学習ノートをビニル袋に入れて持参 ※2人組で2往復するが両手で運搬
11:00	学習「カヌーで観察・実験」 場所: うかいレストプラザ前河原 ・カヌーに乗ってうかいレストプラザまで移動(トイレ休憩) ・隣の飼育小屋で説明を聞いた後、河原や川の流れの観察と実験	トイレ: うかいレストプラザ
12:30	「河原でランチタイム」 場所: うかいレストプラザ前河原 ・みんなで仲良くお弁当タイム ・食べ終わったら自由時間、石探し、石立、水切りなどをして遊ぶ	水切りは離れた場所で安全を確認(所員) ※トイレの声かけ
13:30	体験「カヌーツーリングに出かけよう!!」 ※川の観察含む コース: うかいツーリング→大洲城(約3km) ※如法寺河原にトイレ有り	併走車と無線連絡 ※先導(所員)、班の間に引率、最後尾(所員)
15:00	学習「ツーリングをふりかえろう」 場所: 大洲城前河原 ・班の代表者が感想発表 ・そうきんがけ、水抜きをして橋の下までカヌーとパドルを運搬	記念写真 併走車 ※ぞつきんを運ぶ トイレ: 集会所
15:30	・狐川橋の富士山側の道路へ移動、交流の家/バスで帰所 ・着替えて休憩、洗濯など	※トイレの声かけ

9 ツーリングマップ



10 連絡先

国立大洲青少年交流の家 企画指導専門職 TEL 0893-24-5176